

学習者の興味を引き出す学習支援環境について*

松田 武[†] 齋藤 健司[‡] 斎藤 一[‡] 前田 隆[‡]
 北海道情報大学大学院[†] 北海道情報大学[‡]

1. はじめに

近年、学生の「基礎学力の低下」が指摘されており、学生自身の人間性・問題も多様化している。また、最近の情報技術であるデジタルコンテンツや E-learning を用いた学習が少しずつ普及しつつある。デジタルコンテンツはその特性により、「理解しやすい」「興味を引く」といった「教育を支援する機能」があり、さらに他の機能と組み合わせることでその効果を向上させる可能性がある。

上記の背景を踏まえて、我々は「家庭教師」という立場から、対象としている学習者への学習支援について考察していく。そのためには学習者自身の「興味」と「やる気」を引き出し、かつそれを持続していく事が重要であると考え。そこで、教育学の観点から、学習者を捉えて指導するだけでなく、その学習者を支援するための方法についても検討する。

本論文では特に、このような基礎学力が十分ではない学習者を対象に、学習への興味を引き理解を深めるための学習支援環境作りについて検討する。

2. 対象とする学習者の状況

2.1 事例

中学生。数学を例に取り上げると、計算そのものはある程度出来るのだが文章問題(小学校高学年くらいのレベルでも)となったとたんに解くのが困難になってしまう。文章読解能力が低く、書くことも苦手である。

また、節々に強い劣等感を持っているように見受けられ、落ち着きが無い。

2.2 問題点

上記の事例を踏まえると、一般に基礎学力がやや劣ると言われる学習者には次のような共通の問題点があると考えられる。

- ①文章読解能力・文章表現力が世間一般的に見てやや低い。
- ②自信の低さ(強い劣等感)ゆえに、少しでも難しくなると投げ出してしまいう傾向がある。
- ③性格に甘え(すぐ教授者に頼る)があったりして、学習がはかどらない。

2.3 学習者を捉える

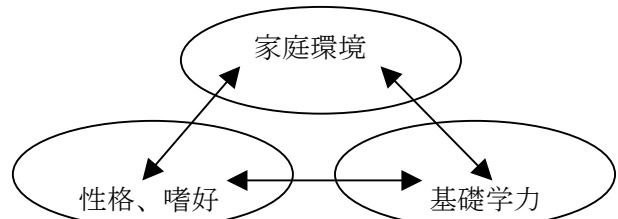


図1. 学習者を捉えた時の状況

我々は、教える立場から以下のように考えている。

学習者を捉える時、三つの要素があると考えられる。図1の中の家庭環境、性格・嗜好、基礎学力である。以下にそれぞれの説明をする。

2.3.1 家庭環境

社会の基盤の最小単位であり、学習者はここに依存する。そのため、学習者を知るにはまずこの状況を知る必要があると考える。

学習者は「家庭」という環境で育つため、この環境に問題があればより良い方向へ修正する必要があるだろう。また、保護者である父兄の方にしか出来ない支援もあるため、その協力が重要である。

2.3.2 性格・嗜好

学習者の性格・嗜好がわかれば、それに沿った学習内容・教材・指導方法を提供し、学力の向上につなげることが望ましいと考えられる。

そのためにも、学習者の特徴をしっかりと捉える必要がある。

2.3.3 基礎学力

学習者の基礎学力を理解していなければ、それぞれの学習者個人に沿った学習指導法の提供は難しいと考えられる。これらを踏まえて、次の方法で学習を支援していきたいと考えている。

* Study on Learning Support Environment Drawing Out Learner's Interest

Takeshi Matsuda[†], Kenji Saito[‡], Hajime Saito[‡], and Takashi Maeda[‡]

Hokkaido Information University^{†‡}

- (1) (学習者の趣味・嗜好に合わせ)興味を持たせること
- (2) 徹底した反復練習をさせること
- (3) 正当な評価をすること

(1)～(3)とも ARCS モデルを基にした手法であり、以下に説明を記す。

(1)は言葉通り、学習者の嗜好に合う関連した内容を学習に組み込み興味を持たせる試みである。

(2)は、同じ事を何度も練習させることにより、集中力・自信をつけさせる試みである。

(3)は、些細なことでも頑張ったり、より良くなったのなら褒めてあげることで学習者の「やる気」を引き出す試みである。

3. 学習支援環境の構築

3.1 背景

学習者を取り巻く環境は年々変化しているとはいえ、基本的には「教授者」「学習者」に加え「家庭」が存在するという点が重要であると考えている。我々は、教授者には「学習者には様々な人との係わり合いがあるとはいえその基盤は家庭であり、学習者の学習を大きく(主に精神面で)支援できるのはその保護者である父兄である」と考えている。

そのため、実際に教えているときだけでなく、その場になくとも自ら進んで学習が出来るようになればいいだろう。よって、そのための環境作りが必要であり、図2にその構成を示す。

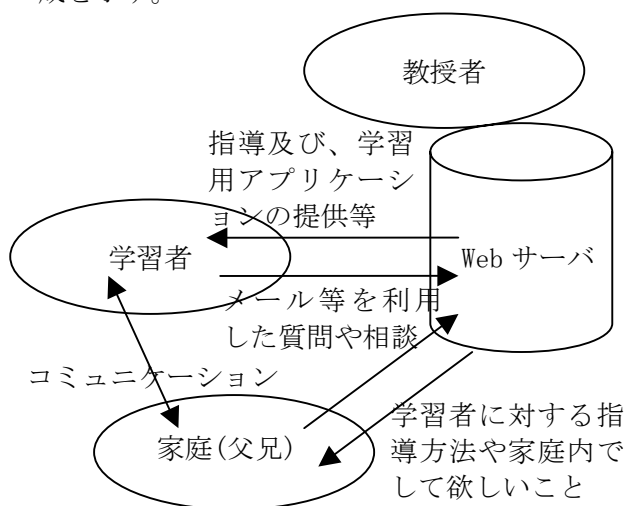


図2. 学習支援環境

3.2 指導及び学習用アプリケーションの提供

学習者の性格・嗜好をあらかじめ把握した上で、学習者に Web サーバ上の各種学習用アプリケーション(ARCS モデルに基づいて作成した Java や FLASH アニメーション等を用いたデジタルコンテンツ、学習用アプリケーション、及びその他機能)を使用してもらい、更に何らかの方法(Eメール等)で教授者と学習者とがコミュニケーションをとる事により、学習者がより学習内容の理解が出来るようにする事が望ましい。

3.3 保護者に対する学習者への働きかけ

学習者のみと接するだけではなく、その保護者とも連絡を取り合うことで、学習環境を支援する。

4. おわりに

本稿では、「家庭教師」という具体例を用いてどのように学習者を支援したらよいかについて触れてきた。

今後は、今まで述べてきた内容を元に実際にこの環境及び格学習用アプリケーションの作成を計画している。

参考文献

- [1]「教材設計マニュアル」 資料7・資料8、鈴木 克明 著 北大路書房 2002年発行
- [2]山川 広人、高橋 孝博、渡部 大志、小松川 浩：4R-5 情報処理学会第66回全国大会 「知識データベースを用いたリメディアル教育向け数学 e-learning システムの実証開発」
- [3]「学力の基礎は読み書き計算にある-徹底反復 山口小学校の授業実践-」 陰山 英男 著 小学館 2001年発行